

## 『「時疫」の社会史—18〜19世紀の病と人間』

平野 哲也

## 一 本書の概要

本書は、盛岡藩と弘前藩をフィールドとして、病名や症状が特定されない流行病である時疫を切り口に、十八世紀から十九世紀における社会状況とその変化を追究した成果である。時疫の発生・流行を長期的スパンで経年的に把握し、時疫の実態、社会に及ぼすさまざまな影響を丹念に解明している。感染拡大の温床となる社会条件・歴史的前提に対する著者の目配りは広い。とくに、松前持などの労働力移動と農業労働力の枯渇⇨内憂、ロシアの接近に伴う松前・蝦夷地警備の過剰負担⇨外憂という当該期の北奥地域がおかれた社会変動との関わりを重視している。時間と空間の交差する地点で、時疫と人間・社会の相互関係を読み解いたのである。著者の視角は、以下の構成に鮮明に表れている。

序章 十八世紀から十九世紀へ—「時疫」と社会変化

第1章 「時疫」の十八世紀—盛岡藩 内在する疾病のリスク

第2章 十八世紀後期の災厄—弘前藩 安永の「時疫」

第3章 「時疫」と「病気」—盛岡藩 潜在化する「時疫」

第4章 「御施薬」と「在医」—弘前藩 文化十四年の「時疫」と

## 医療

第5章 除災・消除と占い—弘前藩「荒ぶる自然」と呪術の広がり

第6章 「病」を騙る—盛岡藩「者頭」たちの勤番忌避

おわりに 「時疫」の時代—社会変容とリスク

まず、本論の概要を章ごとに紹介する。細部にわたって多彩な論点が提示されているが、主要な解明事項と主張に絞って見ていく。

第一章は、盛岡藩家老の日記『雑書』から時疫の記事を博搜し（家臣の罹患記事が多い）、十八世紀の同藩における時疫の流行状況を復元し、飢饉との関連性を追究する。天和元年（一六八一）〜寛政十年（一七九八）の年間死亡率と時疫の流行状況を重ね合わせ、とくに明和期に時疫が進行し、安永期以降は時疫の継続的流行が死亡率を押し上げていた可能性が高いことを指摘する。つまり、時疫流行の延長線上に天明飢饉の深刻な被害を見通しているのである。時疫先行という状況は、寛延飢饉・宝暦飢饉にも当てはまるといえる。同藩の家臣層は、罹患や病死によつて職務遂行不能、家督相続の困難や取り潰しなどの憂き目を見た。在方では労働力不足のせいで農作業が遅れ、藩全体の農業生産が打撃を受けた。著者はそこから、「天候不順⇨凶作⇨飢饉⇨「時疫」流行ではなく、「時疫」流行⇨労働力不足⇨農耕遅滞⇨天候不順⇨凶作というサイクル」を見出している。こうした事態に対して盛岡藩領の寺社は、「疫病退散」と「五穀成就」を一体的に祈願した。それは、年貢皆済を第一とする藩が、神仏の力によつて「時疫」流行⇨労働力不足⇨農事遅滞⇨天候不順⇨凶作」の悪しきサイクルを断ち切り、「健康確保」を起点に「労働力充足⇨農事順守⇨季候順行⇨豊作⇨「五穀成就」という自

然のあるべきサイクルに引き戻す試みだったとする。

第二章では、十八世紀後期の弘前藩に焦点を当てる。寛文四年（一六六四）～享和二年（一八〇二）の同藩領の疾病記録を網羅的に検討し、安永二年（一七七三）の時疫の大流行と社会対応の実態を掘り下げていく。まず、新田地帯や山麓の村のように「経済的に豊かではなく、衛生状況や栄養状態も良くない」所で、貧困な者たちに感染が集中することを指摘した。高熱による意識障害や異常行動、自死・自傷行為の数々、家族内感染による家族介護の崩壊、感染を恐れる親族・隣家の救済・支援放棄がもたらす病状悪化など、時疫流行の苛酷な実情を次々解明する。時疫が、在地社会における相互救済のネットワークを切断し、「社会的な介護放棄」を現出させ、感染家族を社会的孤立に追いやったというのである。そういう「病家」では餓死者も発生した。藩は、自己救済ができない罹患者に米・味噌を支給し、除災儀礼（領内の寺社や吉川神道に頼った祈祷・守札配付）や施薬を行うが、著者はこれらの多くを「政治的見せかけ」だったと批判する。その上で、藩が物質的な各種救済を村方に転嫁していた点を抉り出す。藩は、地縁・血縁・村役人・上層百姓に相互扶助（「助合」「見継」、藩の施薬用の上納金も）の責任を押しつけたのである。さらに藩は安永三年五月、「百姓に農事専念と年貢皆済を強制する」目的で、相互監視・相互扶助の制度「五軒組合」の形成を在方に命じた。しかし民間の救済・介護には限界があり、「病家」は結局は上層百姓からも見放された。藩の期待とは裏腹に「村方での相互救済」の体制は破綻したとする。著者は本章で、疫神を送り出そうとする藩と疫神の流入を恐れる青森町の町人がせめぎ合う「境界としての青森

の海」の性格も浮き彫りにしている。

第三章では、天明飢饉後、寛政期の盛岡藩に再び目を向ける。まず、城下や在方の諸寺院による開帳・祈祷・守札配布、時疫に起因する家臣（とくに下級家臣）の転職・退役・救恤願い・家督相続の混乱・養子願いなどを徴証として、寛政期以降の時疫の継続的流行を実証する。領内で偏差があり、症状は軽度であったとしても、時疫の潜在的流行は、ひとたび凶作（低栄養化状況）に見舞われると全領に爆発的な疫病流行をもたらす火種であり続けた。家臣団内の罹患者の増大は、藩の職制・組織を動揺させる因子ともなった。寛政二年（一七九〇）から文化三年（一八〇六）にかけて領内のさまざまな寺で、一部に宝曆飢饉も含め、天明飢饉時の「疫癘」死者の追善供養が再三執り行われた。著者は、寺々が、餓死者ではなく疫病による死者の供養を藩に願い出た点に注目する。それは、餓死者という表現が仁政（救済）を果たせなかった藩の失政批判につながることを避けたためだと解釈する。一方、疫病は人知の及ばない現象であり、人間の責任と無関係のものとして認識されていたとする。飢饉とその死に介入する人為の要素を無化・希薄化するために、飢饉と疫病が結びつけられたと理解するのである。また、時疫の原因を疫病神とする認識、神仏の力で時疫からの回避をはかる下層民の志向、そうした在方の信仰世界を背景に村々を廻り、祈祷や守札配付で金銭を得る民間宗教者の発生についても言及する。

第四章では、弘前藩のさまざまな医者による施薬の実態を藩の政策との関連で解明し、時疫流行下の藩の医療体制における「在医」の役割を跡づけた。そもそも弘前藩では、領民救済のために藩が主導する「御施

「薬」と民間が主体となる「施薬」が並存していた。十九世紀初頭の時疫流行に際して藩は、五山に祈祷・守札配付を命じるとともに、「在医」が手に負えなくなった段階で廻郷を伴う「御施薬」を藩医に指示する。

著者はそこに、「神威を仮る行為と、科学的な医療体制の強化が矛盾なく有効な対処」となる近世の時疫対策の特質を見る。民間信仰と医療の共存である。ただし、藩の「御施薬」の対象は自身で療治が叶わない下層民に限られていた。しかも、社会的弱者の救済の体を見せているが、農業生産の安定、確実な年貢取納こそが藩の狙いであり、財政を圧迫しない範囲という限界があったと著者はいう。「御施薬」はもともと、藩命により藩医が調合した薬を郡奉行を介して在方へ配付する形で行われていた。それが文化十四年の時疫大流行時には、藩の意向により「在医」が直接「御施薬」を行う形式に変化している。「在医」を取り込んだ医療体制の強化といえよう。弘前藩の医療体制は、まず「在医」が治療にあたり、それがうまくいかない場合に藩医が治療を担当するという二段構えになった。著者は、こうした「在医」動員の理由を時疫の猖獗と藩医の診療忌避（感染を恐れる藩医）に求めている。「在医」には藩から米銭が支給されたが、中には無償・自己負担で施薬・治療を行う者もあった。その後、天保元年に藩は「御施薬」の担い手を「在医」から藩医に引き戻す。しかし村方は、藩医送迎の負担を嫌い、「在医」の「御施薬」を求めた。藩は村方の願いを受け容れ、迅速な治療を徹底するために再び「在医」による「御施薬」を承認したという。

第五章のフィールドは弘前藩である。領民の社会不安が高まる十八世紀半ば以降の時代状況に、除災・消災呪術の広がり位置づけている。

著者によれば、農業生産や人々の暮らしを危機に陥れる時疫は、異常気象・自然災害とともに人為が及ばない「荒ぶる自然」であった。有力寺社は、祈念によって「荒ぶる自然」を鎮め「あるべき自然」に戻す使命を帯び、藩権力を守護していた。しかし、領民救済の面では不十分であった。「荒ぶる自然」の直撃を受ける領民、それも経営破綻や没落の

危機に瀕する下層民は、独自に除災・消災の呪術にすがろうとした。実際十八世紀には、藩士・町人・百姓の期待のもとに、藩権力に頼らない除災・消災の儀礼・呪術が民間宗教者によって広く執行される。こうした状況の中、藩は、たとえば男女が「異様之風俗」をして群れ集まる「讃念仏」に風俗の乱れを見出し、「在方小者共」の遊民化を危惧して禁止した。著者は、当時の俗信の広がりや呪術に対する厚い信仰について、領民の「心理的安全性」を得る手段だったと評価する。「在方小者共」だからこそ「不確実な社会に対する不安感」や虚無感が募り、集団的に現実逃避と利他的・享樂的行動をとったと理解するのである。十八世紀後半には、経営基盤の脆弱な小作・日傭取層が、不可思議・怪異そのものに強い関心を抱く傾向が強まった。彼らは、民間宗教者に怪異の意味を読み解かせ、呪いの力によって吉凶を予知し、災厄を取り除き、奇跡を享受しようとした。さらには、社会的弱者に利益・富をもたらすスローリーとして怪異を読み替える俗信まで生み出されていた。貧困層・社会的弱者の社会不安と危機感、そこから脱出を図ろうとする思念が、祈願・祈念の新たな執行者として民間宗教者に活躍の場を与えたのである。著者はさらに、呪術による除災儀礼が幕末期にかけて、観衆を魅了する娯楽性を強め、奢侈的な年中儀礼に変化していくことも展望し

ている。

第六章は、病気から、十八世紀末～十九世紀初頭の盛岡藩と家臣の間の矛盾に迫る、興味深い論考である。寛政七年（一七九五）、諸種の支出増大に喘いでいた盛岡藩は、財政補填の目的で村方に御用金・諸役を賦課し、買米を強制した。しかし百姓一揆が起きたため、百姓に対する賦課を諦め、藩士からの借上（前借り）に踏み切った。その後文化期にかけて、幕命により盛岡藩の松前・蝦夷地警備の負担が過重となる。そのしわ寄せは下級藩士・軽輩・地方給人に及んだ。彼らは、人足勤め（蝦夷地での勤番、渡海場所での待機）や自弁での武装・軍備など、さまざまな負担を背負い込んだ。勤番士以外の藩士にもさらなる借上が命じられた。日露関係の軍事的緊張の高まりと勤番体制の強化の中で、藩士の「職務遂行に対する意欲の減退」が顕在化する。それが、詐病による「者頭」層の勤番拒否であった。「者頭」は、下級藩士（同心層）や軽輩を指揮する、藩の軍事組織の中核であった。著者はこの背後に、下級藩士の疲弊や組織の行き詰まり、軍事的負担に対する忌避意識を見出す。他方、藩は職制上の指示系統を無視して、「者頭」配下の同心を直接抜擢する人事を断行した。これは「者頭」の職権・指揮権を否定・侵害、家臣団の序列を乱すものであり、藩に対する「者頭」層の反発を増幅させた。「者頭」層の詐病には、「職務の放棄―不服従という消極的な結果」としての藩政批判」の意味があったと著者はいう。藩も、「者頭」層（やがて窮迫する家臣団全体に拡大）の詐病・怠業を見抜いており、藩士に職務専念を強制した。藩と家臣団の間に生じた亀裂は、その後も松前・蝦夷地勤番体制の強化に伴って拡大していくという。純然たる病苦

というより、藩に不満をぶつけ、自分たちの存在意義を訴える手段として病気を利用する「者頭」層のしたたかさが浮かび上がってくる。

## 二 本書の成果と若干の疑問点

本書は、時疫流行の局面を断片的・羅列的に取り上げたものではない。盛岡藩・弘前藩という特定地域に根差し、長期的な視野に立ち、十八世紀から十九世紀に至る「継続的な「時疫」の流行」と「病気」が社会のなかで普遍化していた」時代状況を明らかにした。その上で時疫を軸に、百姓の農耕・生活、藩士の職務や藩政、医療、信仰、松前・蝦夷地警衛や労働力移動など諸種の社会事象の相互関連を構造的に把握し、社会の一連の動向を追究しているのである。

本書では、同様の歴史的事実と論証が複数の章にわたって繰り返し叙述されている。それはとりもなおさず著者の強調する論点である。各章の関連性と本書の体系性の証左ともいえる。ここで、各章の概要との重複を厭わず、本書全体を貫く著者の主張、本書の大きな成果を振り返っておこう。

何といっても、通説となっていた「天候不順↓凶作↓飢饉↓「時疫」流行」という理解を覆し、「時疫」流行↓労働力不足↓農耕遅滞↓天候不順↓凶作という「負の連鎖」を提示した点が本書の独自性である。つまり、凶作・飢饉に先行して、農業生産を減退させ、貧困を加速化し、社会を疲弊させ、人々の不安を煽る、時疫の脅威を析出したのである。

著者は、時疫の断続的流行が人々の健康・栄養状態を悪化させ、天候不

順への社会対応力・耐性を弱らせていたところに異常気象が襲ったことで、凶作・飢饉の被害が著しく拡大したと捉えている。飢饉（それに伴う騒擾）の前提・誘引となる時疫の特性を見抜き、人々を困窮の淵に陥れ、死に至らしめる「荒ぶる自然」としての影響力・規定性を強調したのである。それゆえ著者にとって時疫は、社会変動の主因をなし、歴史研究の正面に据えるべき対象となる。

時疫と貧困の相互関係の追究も重要である。著者は、新田地帯や山麓に時疫が極端に流行することを突き止めた。そうした地域は、そもそも生産環境が劣悪、農家経営が不安定で、生活環境も劣悪だったという。凶作・飢饉に見舞われずとも、食糧不足・低栄養状態・衛生環境不良が常態化しており、時疫が発生・流行しやすかったことを論じている。時疫は、そうした地域の農業労働力を奪い、農業生産を麻痺させ、生活環境の悪化に拍車をかけた。さらに十九世紀に入ると、日露関係の緊張の高まりにより、盛岡藩・弘前藩に対する松前・蝦夷地警衛動員が強化され、藩によって諸負担が領民に転嫁される。その打撃が最も深刻に現れるのが新田地帯や山麓の村々であった。弘前藩では文化十年、年貢減免を求めて百姓が強訴を起こすが、その中心地も時疫流行が激しい新田地帯に重なるという。生産環境・生活環境の劣悪さや貧困が時疫の温床となり、さらなる時疫流行の素地を作り出すとともに、さまざまな社会矛盾が輻輳する悪循環構造を掘り起こしたのである。

時疫がもたらす社会不安・混乱と社会の分断に関する論及も濃厚である。ある家族における罹患者の発生は、当人の労働力を奪うばかりでなく、家族内での感染拡大、人手不足による農作業の遅れや病人介護の過

重負担に帰結する。食糧不足・低栄養化を加速させ、やがて家族介護は崩壊するという。そこに追い打ちをかけたのが、感染を恐れる地縁・血縁の救済忌避であった。本来、最も頼りになるべき地縁・血縁から見放され、農耕の共同作業や相互扶助の仲間からも排除される百姓の姿がいくつも挙げられる。村役人・重立層も感染者への助勢には及び腰であり、診療を避ける藩医もいた。時疫が、従来培われてきた人間関係・絆を寸断し、地域社会・村社会の相互扶助・救済の仕組み・慣習を破壊したのである。著者の理解によれば、感染家族は「地域社会から疎外され孤立」していくしかなく、「社会的な介護放棄」状況が顕然となった。こうした歴史的現実には、菊池勇夫氏の研究でも、社会の「隔絶」として明らかにされている（菊池勇夫『江戸時代の災害・飢饉・疫病』吉川弘文館、二〇二三年）。時疫は人を選ばないが、その流行のもとで人が人を選び、人を排除・差別する社会状況を生み出したといえる。本書は、時疫流行が起点・下地となって連鎖・拡大する複合的危機の諸相を詳細に解き明かしている。

著者は従来、十八世紀（とくに中期以降）から十九世紀を、「グローバル化」が進行し、近世の国家・社会の構造原理・枠組みが動揺する「長期にわたる転換期」だったと主張している。その視角は本書にも一貫している。本書では、十八世紀中期以降十九世紀に至る時代状況として、時疫の断続的・長期的流行が招く複合的危機とそれによる社会の動揺を明示したのである。その意味で、北奥地域における当該期は「時疫」の時代であった。

こうした実証と論点は説得的で、首肯・傾聴すべきである。ただし、

長期的な時疫流行に対する人間社会の応答という視点で考えたとき、若干の疑問が湧いてくる。

本書には、貧困を背景に時疫の波に翻弄され、没落する百姓が随所に登場してくる。たしかに、それは一つの実態だったろう。他方で著者は、除災儀礼を一種の娯楽とし、熱気をもって群れ集まる男女の姿を捉えている。藩士の中には、病気を逆手にとり、藩に対して密かな抗議を行う者もあったという。評者はそれらから、時疫に抗い必死に生き延びようとする人々の意思・エネルギー、病気を都合よく利用する巧みさを看取する。長期に及ぶ「負の連鎖」が解明されればされるほど、その間、人間社会が受け身かつ無力のままであったのか、検討の必要を感じるのである。著者はこれまでの研究で、時代を生きた人々の経験知を汲み上げてきている。個々の百姓とその家族、地縁・血縁組織、村や地域社会は、そうした経験知を生かして時疫に対する耐性を鍛えられなかったのだろうか。時疫を未然に防ぐ社会対策、時疫発生時の緊急措置はとれなかったのだろうか。医療の面では、罹患と治療の経験の蓄積を踏まえて、個人レベルでは難しくとも、社会レベルの対策（村や藩を単位とする栄養補充・体力増強策や感染予防策など）を講じることはできなかったのだろうか。北奥地域を波状的に襲った時疫と凶作・飢饉は、回復しようとする百姓や藩の意思を押し潰し、人間社会の対応を無に帰すほどの威力を持ち続けていたのだろうか。

評者の関心からすると、「社会的孤立化」を克服し、時疫由来の複合的危機に対する社会的・組織的対策を考案・実行できなかったのか、最も気になった。本書では、社会の分断、社会関係の崩壊が強調される。

その実情・傾向は、十八世紀以降十九世紀を通して不変、あるいは深刻化する一方だったのであるか。評者はむしろ、危機が深まる時代だったからこそ相互依存の力が試され、より安全・安心な社会の構築に向かうとする人間の意思がバネとなり、従来に増して社会救済が模索される側面があったのではないかと推察する。時疫という危機は、社会的なセーフティネットを整備・拡充する機会とはならなかったのだろうか。その力は、家族・地縁・血縁・村など身近な社会関係の中で発揮されるものであったろう。農事に限ってみても、一軒の百姓家の遅れは、生産環境維持の面からも年貢上納の面（村請制下の連帯責任）からも村全体のダメージに結びつく。それでも村の百姓は、感染家族から離れた場所に居て、自分たちの身を守ることだけに終始していたのだろうか。評者が調べた下野国都賀郡の事例では、病難者の家で農耕の遅れが予想される場合には、例年を越える共同労働の加勢を得て農事を完遂している（平野哲也「江戸時代後期の村の災難と百姓の対応」『栃木県立図書館研究紀要』第二六号、二〇二二年）。流行病か慢性疾患か判断できない憾みはあるが、特定家族の病難は村全体の危機と見なされ、いっそう手厚い支援を受けている。つまり、病難の際こそ相互扶助の精神・営為が盛まっているのである。

藩の時疫対策についても著者は、一時しのぎで、根本的な救済に向かわず、民間社会に転嫁する否定的な側面を描出している。極端にいうと、無為無策の藩政イメージが押し出されているのである。しかし評者には、たとえば藩医・「在医」を編成・動員した弘前藩の医療体制は充実したものであり、一定程度の医療効果を上げていたように読み取れる。十八

世紀後半から十九世紀にかけて北奥諸藩にのしかかってくる諸負担や時疫流行の重圧、社会矛盾は容易に想像できる。ただ、そういう逆境の中で鍛錬される藩政の新展開がなかったのか、検討する余地はある。

十八世紀から十九世紀に至る長い射程で時代を捉えつつ、時疫がもたらす危機の変質、人間の主体性・自律性に基づく社会対応の変化、社会的レジリエンスのあり方や形成について、さらなる検証が求められよう。

ここで挙げた疑問は、分析対象の史料に起因する問題かもしれない。本書で用いられた史料は主に、藩ないし家臣による公式記録である。そこには、在方での時疫流行の様相や藩・家臣が味わった危機と対応の事例が豊富に記されている。ただし村方文書に慣れ親しんでいる評者には、若干の物足りなさが感じられた。新田地帯や日傭取の貧困の質と程度についても、実は不鮮明である。御用留を用いて食糧難の一端が述べられているが、村や百姓の貧困の実像をさらに具体的に掘り下げるべきである。そのためにも著者には、藩（家臣）の状況認識にとどまらず、北奥地域に現存する諸種の村方文書を駆使した研究を期待したい。それにより、時疫に直面した百姓の農耕・暮らしの実態、彼らの生の体験や声・意識を直接すくい上げることができると考える。藩側の記録と村々の百姓が書き残した史料を突き合わせて、時疫の社会史を深化させてほしい。推論としては妥当だが、十分実証しきれっていない点も残っている。たとえば著者は、松前・蝦夷地警備に向かう幕府役人・諸藩人数の移動、松前の労働力需要に引き寄せられた「民衆移動」（松前拵）で、人と物の移動のレベルが格段に上がり、時疫流行の危険性が高まっていたことを指摘する。とりわけ、時疫流行の社会的条件として、経済社会化の進

展、人々の流動の激しさを指定した点は重要である。ただし、想定レベルにとどまっていた、人間の移動と感染拡大の具体的な因果関係の解明には至っていない。同様に、数々の怪異が何らかの社会不安を反映していることには同意するが、時疫との関連性については明確な言及がない。

著者は本書で時疫と凶作・飢饉の時系列を重視し、凶作・飢饉に先んじて被害の拡大要因となる時疫の蔓延を指摘している。ただ著者も、飢饉後の疫病流行という通説（菊池勇夫氏の一連の研究を参照）を完全に否定しているわけではない。実際、本書で掲げられた史料も、天候不順を契機として凶作・飢饉に至り、翌年に疫病の流行と死者の増大があったことを証言している。北奥地域における時疫と凶作・飢饉は単純な前後関係ではなく、それぞれが原因となり結果ともなる相互作用の関係にあり、ともに社会的危機を増幅していったと考える方が実態に合っているのではないだろうか。

これまで述べた疑問は、評者の理解不足や誤読による恐れが大きい。また、本論の論証・主張を超えた次元での無理な要望となっていることも承知している。ご海容を願いたい。ただ評者は本書から、疾病を無視した村落史・農業史・藩政史はもはや描けないことを学んだ。時疫から捉え得る社会史の可能性を広げた貴重な研究として、一読を薦めたい。

（A5判、三〇二頁、解放出版社、二〇二二年一月一五日発行、本体価格四〇〇〇円＋税）

（ひらの・てつや 常磐大学人間科学部教授）